

OED とは何か

— シェイクスピアの新語、新語義のリスト作成をめぐる —

英米文学教室 岡 村 俊 明

先に私は、「シェイクスピアの新語、新語義のリスト」(拙著『シェイクスピアの新語、新語義の研究』(溪水社、1996年)に収録)を作成してきたが、その時の作成の中心的な資料となった『オックスフォード英語大辞典』(*The Oxford English Dictionary*) (略称 OED) について、今回はいくつかの点から考えてみたい。

シェイクスピアの新語、新語義は、「新語、新語義であるらしい」というものであってはならず、考察の前段階として、正確なそのリスト作成がなされていなければならない。しかし、批評家ばかりでなく、よく知られているシェイクスピアの造語論(新語論といってもよい)の研究者といえども、新語として例示し、考察しているもののなかに、実際は新語でないものが多々ある。ウィルヘルム・フランツ(Wilhelm Franz)は、その著、齊藤静他訳『シェイクスピアの英語—詩と散文』(篠崎書林、1938年)の「造語論」(143-216頁)において、シェイクスピアの新語でないものを、新語として数多く例示している。私たちが、簡単に見分ける方法は、その用例を『オックスフォード英語大辞典』(これについては、後ほど詳述する)で確認してみることである。それ以前の多くの初出例が見つかるはずである。

先ず、山口誓子の造語(新語)といわれた「門波」について検討してみよう。

俳人の山口誓子が、1994年3月26日、92歳で亡くなった。氏を偲んだ文章が、新聞・雑誌等に寄せられたが、その一つは『朝日新聞』の「天声人語」(1994年3月28日)である。

古い言葉を組み合わせる新しい言葉をつくるという試みも、俳句に新しい感覚を盛る努力の一つだったのだろう。門波(となみ)、山扉(やまと)、青嶺(あおね)、枯路(かれじ)、その他の造語がある。代表的な句にも使われている。「流水や宗谷の門波荒れやまず」。

これには後日談がある。同じ「天声人語」欄(1994年4月4日)に、読者からの指摘で「門波」という造語は『万葉集』ですでに用いられていた、と記されている。とすれば、「門波」は山口誓子の造語ではなくなる。このように新語の作り手は誰かを見定めることが重要である。

しかし、この指摘は一読者の記憶によるものではあるが、わが国の日本大辞典刊行会編『日本国

『語大辞典』（小学館、1976年）に、その出典についての記載がある。同辞典に収録されている「門波・戸波」に、次の三つの引用例が挙げられている。

万葉，七・1207「淡島に漕ぎ渡らむと思へども明石の門浪（となみ）いまだ騒けり<古集>」
久安百首，雑下「播磨がたあかしのとなみ騒ぐめりしばしな出でそかこの舟人 <藤原実清>」
凍港<山口誓子>「流水や宗谷の門波（トナミ）荒れやまず」

これらの用例を見れば、「門波」という語は、『万葉集』（1207年）で初めて作られたということ、またその後のおおよその歴史の変遷が分かるであろう。それを裏付けるようにこの辞典の「発刊の辞」には次のような記述がある。

国語大辞典の生命は、まずその引例文にある。上代から現代に至る実際の用例を集め、その上立って意義用法を記述すべきである。そのために、国語大辞典の編纂は、さまざまな分野の資料を渉猟して、その中からことばの生きた使用例を集めることから出発する…。

また、国語大辞典は、今日の日本を正しく反映するものでなければならない。従来の国語辞典にとられてきた語彙の範囲を広げ、固有名詞・専門用語、あるいは、方言・俗語などをも収め、広く日本語をとらえる必要がある。そして、そのためには、ひとり国語国文学界のみならず、さまざまな学問分野からの幅広い協力を仰がなければならない。

『日本国語大辞典』は、右のような判断と構想の上立って、日本語の歴史を振り返り、一語一語の経歴を明らかにし、さらに未開拓であった現代日本語についても、その背景を明確に把握しようとするものである。

このように語の経歴を明らかにし、用例を歴史的に記述したことがこの辞典の特色であり、それはわが国では大きな業績とはいえようが、歴史的原理に基づいた大辞典としてはこれで十分なのか、ということに対する疑問点がある。

第一の疑問点は、むしろ欠点といってもいいが、「門波」の記述にあるように、これは『万葉集』のみその年代を記しているが、あとの二つの用例の年代の特定がないことである。歴史的原理の辞典であるからには、どの用例にも、原則的には年代の明記が不可欠であろう。

第二の疑問点は、そこから用例を収集すべき書誌を前もって明記しておらず、閲読者の判断にまかされているため、テキストの異同からくる問題や、方言、俗語等に関する用例の選択に一貫性がないのではないか、ということである。

第三の疑問点は、「門波」に限らず、特に、語の最初の用例は十分に信頼されるものであるかどうか不確かなところがある。私自身はそれを反証する立場にないが、要は、この種の辞典には信頼すべき初出例が収録されることが重要であり、次にそれをめぐって、その辞典の関係者以外の研究者による初出例以前の用例のリストが提示され、論議されて初めて、初出にかんする辞典の信頼性が試されることになる。わが国の国語国文学界に、ことばの初出をめぐるそういう土壤があることに対する疑問である。

こういう疑問点にかかわらず、この辞典は、わが国の国語辞典の編纂の企てとしては壮大な試みであるが、この辞典にはモデルがあったのだろうか。そのことは「発刊の辞」には記されていないが、「上代から現代に至る実際の用例を集め、その上立って意義用法を記述する」という編集方

針から、明らかにそのモデルは、イギリスで発刊されている『オックスフォード英語大辞典』（略称 *OED*）であろう。

では *OED* とはどのようなものか、また、シェイクスピアの新語・新語義は、*OED* とどのような関係があるのかを改めて考えてみる必要がある。というのは、ここで、シェイクスピアの新語、新語義という場合、*OED* 諸版の最初の用例、初出 (first citation) 一語全体の初出が新語、語義の初出が新語義に相当する—及びシェーフア (Jürgen Schäfer) (『オックスフォード英語大辞典における文献—テスト・ケースとしてのシェイクスピアとナッシュ—』*Documentation in the O. E. D. — Shakespeare and Nashe as Test Cases* (Oxford: Clarendon Press, 1980年) による、その初出にたいする先行例と平行例及びシェーフアのリストの補正を含めて私が作成した「シェイクスピアの新語、新語義の全リスト」に基づいて、シェイクスピアのことはについて考えてきたからである。新語、新語義と *OED* との関係がこのようなものである以上、新語、新語義の信頼性についての十分な情報を得るためにも、私たちは *OED* について知る必要があるだろう。

OED は現在は第二版 (1989年) であり、これまで初版 (1933年)、旧補遺 (1933年)、新補遺 (1986年) が発行されている。では、*OED* 諸版の特質及び完成されるまでのいきさつを、主に、それぞれの版に付された序文をもとに、考えてみたい。

OED 初版は、『歴史的原理に基づいた新英語大辞典』(*A New English Dictionary on Historical Principles*, 略称 *NED*) の翻刻である。現在では『新英語大辞典』ではなく、『オックスフォード英語大辞典』として知られている。それは3段組み12巻におよび、総頁数15,487頁、収録語数は414,825語 (そのうち主要見出語は252,259語)、用例数は約180万である。その辞典は、記録に残っている時代(750年頃)から、現代に至る語形、語義等を、歴史的に編纂された用例をもって明らかにしていることである。

収録語彙数だけに関していうならば、収録語数約26万語の『リーダーズ英和辞典』(研究社, 1984年) の1.6倍にすぎない。しかし収録語彙数だけの比較ではいかに無意味かを理解していただかねばならない。

OED は信頼するに足る典拠の引用全体または理解される形の引用からなる。中でも、よく使われる主要語の取扱いは極めて多くのスペースがさかれている。例えば、'set' という動詞には、154の主要項目が立てられ、それぞれの項目には、古い時代順に並べられた引用文がある。その154番目の項目 (set up) には、また a, b, c, , , で分割された下位区分がある。その下位区分は、アルファベットの z で終わらず、さらに aa, bb, cc, , , となり、rr でおわっている。'set' だけで、3段組の辞書が18頁におよぶといったくわしいものである。しだがつて、語彙数だけの比較は無意味であり、要は、その内容であることになる。

OED 初版の完成には長い年月を必要とした。その第一分冊 (四分冊が一巻) の出版は1884年、最終分冊の出版は1928年であった。その間の年月は、45年である。しかしその辞典の刊行計画が1857年に始まったため、その年から計算すると、72年の年月が過ぎたことになる。これほどの大事業であり、それほどの年月を要したのであったが、辞典編纂について立てた最初の計画は最後までみじんも揺るがなかった。その方針とはなんなのか。どういう人たちが編集に関わったのか。

イギリスには、それまで知られていた英語辞典の一つに、ドクター・ジョンソン (Dr. Johnson) の編集になる『ジョンソンの英語辞典』(*Johnson's Dictionary* 1775年) があった。この辞典は、語の定義、用法を系統的に選ばれた文学作品等からの多くの引用で示したことで知られている。この辞典以外に、歴史的原理を導入して編纂した辞書にチャールズ・リチャードソン (Charles

Richardson) の『新英語辞典』(*New English Dictionary* 1836-37年)がある。しかし、これら二つの辞典ではまだ不十分だという認識が英国言語学会にあった。

1857年に開催された同学会において、英語の辞書に「収録されていない語」('unregistered words')を収集する「未収録語委員会」が設けられ、その委員にハーバート・コールリッジ (Herbert Coleridge), F. J. ファーニヴァル (F. J. Furnivall), リチャード・トレンチ (Richard Trench, ウェストミンスターの大司祭)の三人が任命された。この段階で、ジョンソンとリチャードソンの両辞書には収録されていない語彙を収録する、一卷本の辞書の編纂という計画が生まれていた。そしてトレンチ氏は、同学会における二回の講演をまとめた「私たちの英語の辞書における欠陥」('On Some Deficiencies in our English Dictionaries', 1857年)と題する論文を英国言語学会で発表した。これがやがて作るべき辞書の則るべき原理—歴史的原理を明確に指し示した。

このようにして1859年には、英国言語学会の監修の下に英語の辞書を編纂すること、その初代の編纂者にハーバート・コールリッジの任命が決定された。彼は、この辞書の根幹となる用例の収集にとりかかった。勿論、一人のできる仕事ではないため、篤志読者にその仕事を依頼した。

1859年とは、わが国ではまだ江戸時代であり(1868年が明治元年)、欧米諸国に見られる近代的諸整備が不十分であったが、イギリスではすでにこの時代、郵便制度が発達しており、そのことが篤志読者による、国内、国外からの用例の返送を容易にし、辞書の完成に導いたのである。本格的辞典の完成には、このような他の近代的諸整備も必要とされる。

しかしコールリッジは、不幸にして、31歳の若さで死去した(1861年)。その後任には、「未収録語委員会」の一人、ファーニヴァルがあたった。彼の最初の仕事は、篤志読者がすでに読んだ、あるいはこれから読みべき本のリストを作ることであった。24頁にわたるリストは出版されたが、これがあつたために、読む範囲とテキストが限定され、より正確な引用の用例が篤志読者から期待されたといえよう。

ファーニヴァルは、リスト作成ばかりでなく、OEDの歴史において、きわめて大きい貢献をした。この辞典の方針は、語形、語義等を、歴史的に編纂された用例をもって明らかにすることであるが、ファーニヴァルは、中英語(Middle English, 約1150-1500年)の印刷された文献が不十分であることに気づいた。このため彼はこれらの時代の、原稿のままでは残っていない文献を印刷するために、「初期英語テキスト協会」(Early English Text Society)を1864年に、そして中英語の代表的詩人ジェフリー・チョーサー(Geoffrey Chaucer 1340?-1400)を中心とする「チョーサー協会」(Chaucer Society)を1868年に設立した。こういう息の長い基礎的作業をしたことが、ファーニヴァルの特色であり、またOEDの奥の深いところである。中英語の用例の十分な収集がなければ、語の歴史をたどるOEDは、大きな欠陥を持っていたことになるであろう。本格的辞典とは、与えられた文献からのみ作るというものではない。欠落した部分の用例収集のために、本格的テキストの整備という仕事したのである。

しかしファーニヴァルの仕事の関心が、辞書の編纂以外の仕事へと移ったこと、そして経費、補助的人員などの不足のために、英国言語学会は、大辞典の編集に対応しきれなくなっていた。

それを理解した当時の学会会長ヘンリー・スイート(Henry Sweet)は、編集者をジェイムズ・マレー(James Murray)に、出版社をオックスフォード大学出版局に決めた。これが1879年であるが、マレーは辞書編集者として天才的才能を発揮し、またオックスフォード大学出版局は40年以上にわたって、資金と人材の両面において、この辞典の完成に尽力したといえよう。

この時点で同学会と大学出版局の間で考えられていたことは、完成に要する年月は10年程度、頁

数は6,000頁から7,000頁見当ということになっていたが、実際は、45年そして15,487頁となったため、年月にして4.4倍、頁数にして約2.6倍にふくれあがったことになる。マレーは出版のための原稿づくりをすぐ始めたかというところではない。彼は、コールリッジ及びファーニヴァルから引き継いだ200万を越える用例でも、本格的辞典編纂にはまだ不十分と判断していた。というのは、ジョンソンとリチャードソンの辞書の例にまつまでもなく、語義を確立し、その歴史を辿るには、語の信頼するに足る用例が必要不可欠であると考えた。そのためには、更に多くの用例が必要であると考えたのである。

彼は、閲読者を754人に増員し、収集のための方針を明示して、用例収集の懇請の手紙を発送した。それに答えて、十分に集まった用例をもとに、マレーは本格的な辞書の編纂の仕事に没頭することができた。彼らから送られてきた用例は656,900個となった。そして彼の編纂になる第一分冊(A-Ant) (第一巻はA-B) が1884年に発行された。

初版は全体で15,487頁であるが、そのうちマレーが編集したものは約7,207頁であるから、初版の半分弱を彼が編集したことになる。このため OED は、別名『マレーの辞典』(Murray's Dictionary)とも称されている。

勿論、マレーを補助する人がいたが、仕事の膨大な量を考えると、彼一人の責任でアルファベット順に最初から最後まで編集することは不可能である。このため、マレーの助手をつとめて、その後編集者となり、独立して別なアルファベットから編集することになったヘンリー・ブラドリー(Henry Bradley) が登場することになる。

仕事を進めるにあたって第三の編集者が必要となり、当時セント・アンドリュズ大学講師であったW. A. クレイグ(W. A. Craigie) があたることになった。クレイグも、最初はマレーとブラドリーの助手をつとめ、後に独立して別なアルファベットから編纂を始めた。

しかし、第一次大戦の勃発に際して、辞書編纂に携わっていた多くの若者たちが戦場へ行き、1915年には、38年間この辞典の編纂一筋であった編集主幹マレーが死去することになる。1923年には、ブラドリーも死去し、その2年後、クレイグがシカゴ大学へ転出したため、第四の編集主幹C. T. アニアンズ(C. T. Onions) が迎えられた。彼はWの項目から編集を初め、ようやく1928年に OED の完成にこぎつけた。

主だった閲読者は227名、副編集者は62名、助手は65名、本文校閲者は23名である。引用文作成のために閲読者に送られた本のリストは、OED の巻末に書かれている。3段で書かれ、その総頁数は91頁に及ぶ。

OED の編纂はまことに大きな事業であったといえよう。OED 初版の特色は数多くあるが、二つに纏めるとすれば次のようになるだろう。

第一は、出版され続けた年月だけで45年、最初の企画から数えると72年の間、これだけの大規模の辞書にかかわらず、編集の方針が揺るがなかったことは感嘆に値する。これはジョンソンやリチャードソンの辞書の特質を、意識的に取り上げて、来るべき辞書の方針とした人物ウエストミンスター主任司祭トレンチ及びそれを具体化した天才的辞書編集者マレーの功に負うところである。

第二は、この辞書で、多くの用例に裏付けされた語の歴史が明確にされたことである。篤志閲読者によって寄せられた用例は、最終的には約500万に達し、そのうち辞書に収録されたのは約180万である。約3分の1に精選されている。

辞典の宿命とはいえ、完成した途端、改訂の作業が待っている。大辞典として例外ではない。このため OED 初版の出版以後、補遺が2度にわたって出版された。最初の補遺は1巻本の1933年版

(旧補遺)であり，それは OED 初版の出版の期間約45年間に生まれた新語，新語義を取り扱っている。新補遺は，旧補遺が取り扱っている期間に生まれた新語，新語義を対象としているばかりでなく，1928年から今日に至るまでにイギリス及び他の英語圏の諸国で，英語の語彙となったものも含めている。

新補遺は，編者 R. W. バーチフィールド (R. W. Burchfield) によると，当初は約7年ほどかけ，1巻本ということであったが，その完成には29年の歳月が必要とされ，かつ4巻本となった。収録語彙数は69,372語である。

バーチフィールドは，まず最初に，用例の収集から始めた。初版刊行のときと同じく，篤志読者に依頼して用例の収集を初め，約150万の用例を集めることができた。前もって決めていた文献を読んでもらうわけだが，その文献の種類は，重要な文芸作品はいうに及ばず，科学書，新聞，雑誌等を広範に含めることであった。

その編集方針は次の五つである。

- 1 1884年から今日に至るまでの，OED 初版に収録されていない，書かれたイギリス英語の「普通の語」を収録したこと。
- 2 初版は，文学重視 ('literary inclusiveness') の方針であったが，この版もほぼ同じ方針を踏襲し，キップリング，イエーツ，ジェムズ・ジョイスらの作家の語彙を取り入れたこと。
- 3 イギリス諸島以外の国々，特に，北アメリカ，オーストラリア，ニュージーランド，南アフリカ，インド，パキスタンの文書となって残っている英語を大胆に取り入れたこと。
- 4 社会学，言語学，コンピューター・サイエンス，人類学，心理学等の新しい学問から作り出された用語を取り入れたこと。
- 5 性的，排出器官を取り扱った口語的，野卑な語も収録していること。

この後，1989年に OED 第二版20巻が出版された。総頁数は21,728頁，収録語数は616,500語，用例数は約240万，新たに付加された新語，新語義は約5,000語である。この編集方針は，12巻の初版および4巻の新補遺のすべてをテキストを，本質的なところはすべて，変更せずに収録し，その両者を，「連続した，継ぎ目のないテキスト」 ('a continuous seamless text') として融合したことになっている。これは全面改定ではないが，「OED の全面改定は長期間にわたって設定された目標である…。この新しい版は，その目標に向かう，最初の，そしてほぼ確かに，最も根気強い歩みを意味している」 (The full revision and updating of the Dictionary...must be regarded as a long-term goal....This new edition represents the first, and almost certainly the most arduous, step towards that goal.) となっている。

辞典の宿命とはいえ，改訂したとたん次の改訂が待っており，その改訂では，シェイクスピアを含めた近代英語の初出の用例が大きき変わる可能性があるからである。

このことを裏書きするように，第三版の新編者ジョン・シンプソン (John Simpson) とエドモンド・ワイナー (Edmund Weiner) は，世界中で読まれている週刊文芸誌 TLS 誌上で (1993年11月5日)，「OED 第二版に収録されている語及び語義の年代，語義の分類等を変更する可能性のある，文献として残っている資料」 ('any textual material that is likely to modify the dating and status of words and meanings listed in the Second Edition of the Dictionary') の提供を世界の読者に訴えている。勿論，篤志読者は多数いるはずであるが，彼ら以外に，このようなかたちで，編集者が初出をめぐる資料の収集を呼び掛けているものと思われる。

また、第三版の編集主幹 (general editor) である Y. L. ウォーバトン (Y. L. Warburton) は、筆者への私信 (1993年12月6日付け) のなかで、

We are currently engaged in revising the Dictionary, and will be adding many more antedatings as part of this process. We hope to improve in particular the Dictionary's coverage of Early Modern English, and Shakespeare's position will doubtless move again in the game of statistics.

私たちは現在「辞書」の改訂の作業に取り組んでいますので、その過程でより多くの先行例をつけ加えることになるでしょう。私たちは、特に、第二版に収録された初期近代英語の用例を改善することを希望しています。そうなれば、統計上のシェイクスピアの位置は疑いもなく変わることになるでしょう。

と、書いている。第三版では、確かに、シェイクスピアの新語、新語義は変化し、私のリストにあるシェイクスピアの新語、新語義の初出の用例も、単なる初期用例の一つにすぎなくなる可能性はあるだろう。

しかし、その改訂に要する年月は、初版の第一分冊が出版されて、最後の分冊が出版されるまで45年、初版の完成から第二版の出版までの年月が56年ということを考えれば、いかにコンピュータ化されているとはいえ、5年や6年という短期間ではなからう。またその改訂の先にも、また改訂が待っているはずである。

それを考えると、私の「シェイクスピアの新語、新語義のリスト」は、「現在の時点では」という留保条件がついてはいるが、客観的資料に十分なりうる、と思われる。

したがって、「新語であるらしい」ということではなく、すべてこのような手続きに従って作成された「シェイクスピアの新語、新語義のリスト」に基づいたものであるということが、私のシェイクスピアの新語、新語義論の一つの特色であろう。

